

# 愛媛大学医学部

# 同窓会会報

2012 NOVEMBER No.28

発行日/平成24年11月1日

編集発行人/高田 清式

発行/愛媛大学医学部同窓会  
〒791-0295

愛媛県東温市志津川

TEL(089)960-5231

原印刷株式会社

TEL(089)974-8711



表紙写真紹介

## 学生・研修医宿舎「あいレジデンス」

平成24年3月5日 開所式

鉄筋4階建、学生用60戸、研修医用24戸、非常勤講師等の為の  
ゲストルーム2戸を備え、快適で安全な環境を提供しています。

## CONTENTS

会長挨拶	2
学部長挨拶	3
愛媛大学医学部同窓会会則	3
愛媛大学医学部同窓会会則施行細則	4
愛媛大学医学部同窓会 申し合わせ事項	4
第28回通常総会報告	5
卒業生からのメッセージ	6
新任教授からのメッセージ	8
医学祭を終えて	9
スタンフォード医療研修に参加して	9
同窓会報告	11
支部紹介	13
寄付金者一覧	14
医学部医学科人事異動	15
お知らせ	16

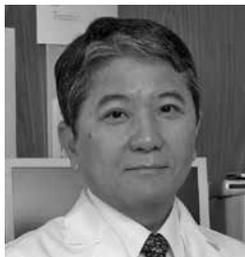
## 会長挨拶



高田 清式(昭和56年卒・3期生)

昨年3月11日の東日本大震災では同窓の皆様にも多くの影響があり、またその後も少なからずの影響を皆様お感じの方も多いと思います。震災前の元気のある日本にいち早く戻ることを祈っております。この最近ではEUの経済危機をはじめ国内企業の不況、TPP問題、ならびに尖閣諸島、竹島、北方四島などの日本国の領土主権問題、毎年の台風や天候不順など多くの話題・事件もあり、さらに医療の分野でも、この震災関連の健康被害や地方の慢性的な医師不足の件など、やはり問題が山積され話題は毎年尽きません。さてわが愛媛大学医学部は昭和48年設立、創設39年が経ち、この3月に第34期生が学窓を巣立ち(医師国家試験の今年の合格率は94.1%で43国立大学では8位)、国内外の医療現場で会員の皆様が毎年積極的な活躍を行っておられます。益々のご活躍を期待しております。大学の近況としては、教育面では平成18年度から導入された「地域特別枠自己推薦(推薦B)」入学者が平成25年度から(今年の入試から)香川県枠の2名がなくなり(香川大の愛媛県枠もなくし)15名から17名が全て愛媛県枠になりました。従って、一般入試65名、推薦A(学校推薦)25名、推薦B17名、学士2年次編入5名の計112名が1学年あたりの定員になっております。このように学生の人数も90人だった時代より増加しており、より一層の医学教育の充実を図る必要性を感じているところです。また、地域医療に従事する医師の確保を目的に県の委託により、本年4月に地域医療支援センターを開設しました。地域医療学関係の各寄付講座と連携し、地域医療を担う医師養成の拠点としての役割を担っております。また、基礎医学分野の教育面では、文部科学省Good Practiceに当大学の「医学・医療の高度化の基盤を担う基礎研究医の養成」が採択され、多くの医学生が研究に切磋琢磨し全国学会や欧文論文掲載で活躍していることをご報告申し上げます。また、学生および研修医の宿舎が完成し今年度から入居しております(学生60室、研修医24室)。なお、設備の充実にあたり会員皆様から寄付もいただきました医学教育トレーニングセンター、総合医学教育棟も、後輩学生・若手医師、会員の教育の場として大いに利用させていただいております。さらに話題として、第2回目の白衣授与式を本年4月27日に全5年生に(臨床実習開始前)厳かに挙行了しました。今後の伝統として継続したいと思います(医学部や総合臨床研修センターのホームページをご参照ください)。また、本年10月に福利会館が改修され食堂などが広く利用しやすくなり、2階には多くの文科系サークルの部屋ができあがりました(名称も、福利会館からコミュニティハウスに変更)。なお、会員皆様に特筆したいこととして、来年医学部創設40周年を迎えるにあたり、平成25年9月25日に記念式典・祝賀会を、さらに記念誌発行、市民講座などを大学で40周年記念事業実行委員会を作り計画を進めております。その一環として、創立以来の臨床第一講堂は大きく改修し会議ができる立派な講堂に変容しました(名称は40周年記念講堂で、10人掛けの机はなくし全て3人掛けの机で椅子も快適)。なお、40周年記念式典・祝賀会へのご参加をぜひお願いいたします(後日ホームページや郵送物などで連絡いたします。心苦しいですが、ぜひ趣旨にご賛同いただきご寄付をお願い申し上げます)。このように私どもが学生の頃の40年近い前には考えられなかった色々な環境整備・充実が進行されつつあり、今後母校の益々の発展を期待しております。以上が大まかな近況ですが、わが同窓会としても、医学部の発展のためにより多く寄与できるように今後も頑張る所存ですので何卒宜しく願い申し上げます。また、今回も遠方の会員の皆様に大学をよく知っていただくことを目的に、私ども附属病院総合臨床研修センターが毎年作製しております「専門研修案内」を、檜垣現病院長とも相談し今年も会員の皆様に同封し配布することと致しました。大学病院の近況の理解に役立てば幸甚です(これを機に大学へ戻って来られる会員の方も大歓迎です)。最後になりましたが、この激動の年も、会員皆様の益々のご健勝をお祈り申し上げます。

## 学部長挨拶



医学系研究科長・医学部長就任のご挨拶

安川 正貴

昨年の4月から愛媛大学医学系研究科長・医学部長に就任しております安川正貴です。同窓会の皆様へのご挨拶が遅れまして大変失礼いたしました。

私は昭和52年に、大学卒業と同時に愛媛大学第1内科に入局いたしましたので、愛媛大学医学部の歴史は古くから良く知っているつもりであります。また、これまで多くの同窓会員の皆様と親しくお付き合いさせていただいており、この場をお借りして感謝申し上げます。

私が昨年就任時に掲げた目標は、医学部と愛媛大学、医学科と看護学科、医学部と附属病院、そして基礎と臨床、この間の信頼関係に基づいた学部運営です。そして、愛媛大学の理念でもある学生中心の医学部です。この1年半の成果としまして、まず国の定員削減の煽りで教室員の削減を強いられていた基礎系教員の増員を図ることができたことを挙げるができます。これは病院長のご理解によって成しえたことで、改めて感謝申し上げたいと思います。また、学生や研修医の学内活動環境も大きく改善されつつあります。福利会館は、「コミュニティハウス」と名前を改め、全面的に改修されました。学生・研修医の宿舎「あいレジデンス」も完成しました。今後も引き続き、体育館やテニスコート・グラウンドの整備、図書館の増改築にも取り組む予定です。研究活動も活発で、世界的に評価される成果が相次いで発表されています。人材育成プログラムも高く評価され、本年文部科学省事業にも採択されました。このように、愛媛大学医学部は教育、研究とも大きな成果を挙げ、着実に発展を遂げています。

お陰様で愛媛大学医学部は、来年創立40周年を迎えます。臨床第1講義室は、創立40周年記念講堂として、より快適な空間として改修されましたし、来年の9月28日には記念式典も予定されています。多くの皆様のご参加をお待ちしています。医学部ホームページも全面的に新装し、今後も頻繁に更新しますので、こちらも是非ご覧ください。

これからも愛媛大学医学部は、社会貢献できる優秀な人材の育成に努め、地域にあって輝ける大学として益々発展することを目指します。同窓会員の皆様には引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

# 卒業生からのメッセージ



## 四宮 博人(昭和54年卒・1期生)

(愛媛県立衛生環境研究所 所長)

同窓会の皆様には、ご清祥のこととお慶び申し上げます。平成24年4月より愛媛県立衛生環境研究所長を拝命いたしました。同研究所の紹介をかねて、ご挨拶申し上げます。

私は、昭和54年に愛媛大学医学部を一期生として卒業し、同大学院(細菌学、内海 爽初代教授)へと進学し、学位を取得後、一貫して基礎医学の研究・教育に携わりました。この間、関東の自治医科大学(微生物学)に7年勤務し、2年ほど米国国立衛生研究所(NIH)に留学しました。平成3年に愛媛大に戻り、平成6年からは助教授として勤めました。大学教員として約30年間過ごしたことになりますが、研究室の酒宴で盛り上がったこと、留学先の米国で長子を授かったこと、日本細菌学会賞を授与されたこと、医学部のBest Teacher 賞を何度もいただいたことなど、楽しい出来事が思い出されます。

衛生環境研究所(以下、衛環研)は、松山市三番町にある所員50名の研究所です。過去の所長の多くは大学から赴任し、また、衛環研から医学部教授として転出した方も3名おられて、大学との交流が活発な研究所です。衛生研究課(7科)と環境研究課(3科)に加え、感染症情報センターと臓器移植支援センターが設置され、今年度から生物多様性センターが新設されました。県民の健康や県内の生活・自然環境に関する安心・安全を守るための科学的・技術的中核機関として、日々活動しています。衛環研の主要な業務は、調査研究、試験検査、研修指導、疫学情報の解析・提供などです。検査では、細菌・ウイルス・原虫などの病原体検査や医薬品検査に加え、今年度から食品中の放射性物質測定が開始され何度かマスコミで報道されました。研究では、過去3年間に、衛生分野16テーマ、環境分野13テーマの計29テーマの研究を遂行しています。今後、大学、国立研究所、保健所、全国の衛環研との連携をさらに強め、同研究所の機能強化に努めたいと思います。

新任所長として、行政機関、医療機関、教育機関、医師会など、多数の方々にご挨拶にうかがいましたが、愛媛の医療や保健衛生が様々な組織の総和によって支えられていることが実感されました。各方面でご活躍の同窓の皆様には、これまで以上に、ご指導とご鞭撻をよろしくお願いいたします。最後に、愛媛大学医学部同窓会がますます発展し、会員の皆様がお元気で活躍されることを、心よりお祈り申し上げます。



## 米持 英俊(昭和55年卒・2期生)

(別府大学食物栄養科学部食物栄養学科 教授)

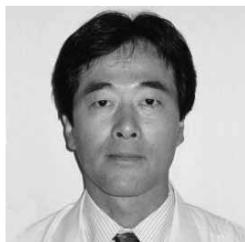
別府大学食物栄養科学部食物栄養学科の米持です。私は愛媛大学の二期生で1980年に故小林譲教授の愛媛大学第一内科に入局し、愛媛大学付属病院と県立中央病院の救急救命センターで2年間の研修を受けた後、大分医科大学内科学第一(高木良三郎教授)に入局し循環器グループの一員として臨床と研究に従事してきました。2008年に教授として大分大学から別府大学に赴任しました。

愛媛大学では小林教授をはじめとして第一内科の先生方には大変お世話になりました。救急医療を勉強したいとの私の申し出を快く聞き入れてくださり、循環器の素人である私は小林教授の紹介により救急救命センターで研修することができました。また、故郷の大分に帰る際に、九州大学での同期生である大分医科大学の高木教授を紹介してくださったのも小林教授でした。いまでも愛媛での8年間は多くの同期生、先輩、後輩、そして教官の先生方に恵まれた忘れられない時間です。

大分大学では組織培養のバイオニヤである高木教授のご指導のもと、ラットの心筋細胞の培養法を確立しました。当時は日本国内で心筋細胞の培養を行っている施設は皆無で高木教授の肝細胞の培養法が大変参考になりました。臨床検査医学(故伊東盛夫教授)に移ってからは培養心筋を用いた心不全、虚血耐性や糖尿病性心筋症の機序についての基礎的研究と、心機能検査と不整脈の臨床を多くの仲間とともに行ってきました。気がつけば、私もいつの間にか50歳代で、准教授という微妙な立場でした。幸運にも、いくつかの教授ポストの誘いがあり別府大学に赴任することになりました。

別府大学の食物栄養学科は栄養学の教育・研究と管理栄養士養成が目的の学科です。医療と直接的な関係の薄い学科の教授に就任したのは、管理栄養士養成カリキュラムの「人体の構造、疾患の成り立ち」を担当する専任教員は医師であることが義務付けられているからです。当初は教育に専念すれば研究はしなくても許されると安易な気持ちでいました。しかし、勉強するにつれて、栄養や食・食事は疾患や健康と深く関わっており決して医学とは無縁ではないことが分かりました。“We are what we eat” “Brain foods” この言葉の意味する所を明らかにすることが私の最後の研究目的です。栄養学からみた医学も面白いですよ、残された魅力的な研究テーマがたくさんあります。今後、多くの同窓生がこの分野に進出することを期待しています。

最後に、ご指導頂いた諸先生方に心より感謝いたします。



## 佐山 浩二 (昭和57年卒業・4期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 高次機能統御 感覚機能医学 感覚皮膚医学 教授)

平成23年4月から愛媛大学医学部皮膚科学講座を担当することとなりました。医学部も愛媛大学、卒業後の入局も愛媛大学だったので、愛媛大学入学から数えると、35年近く愛媛大学にお世話になってきたこととなります。この場を借りてお世話になった先生方にあらためて、御礼申し上げます。

大学入学当初は全学系の山岳部に属していましたが、重信地区に移ってきてからは、山岳部の同級生と医学部山岳部を設立しました。卒業後は登山をすることはなかったのですが、今年から医学部山岳部の顧問を老年科の三木哲郎教授より引き継ぐこととなりました。部の設立に関わっただけに、再び山岳部に関われることは大変うれしく思います。

愛媛大学皮膚科の教授は、初代の三木吉治名誉教授、2代目の橋本公二名誉教授に続いて、私が3代目の教授となります。実はこの三木吉治先生も医学部山岳部の顧問でした。私が皮膚科に入局したのも、三木吉治先生に誘われたからであります。皮膚科と山岳部は因縁のようなものがあるにちがいません。山岳部の諸君、皮膚科に入局しませんか？

大きな声では言えませんが大学時代はあまりまじめな学生ではなく、おまけに半年間インド、中近東、アフリカを旅行したりしていたので、1年遅れの卒業になってしまい、同級生も2学年います。ちなみに、高知大学皮膚科の佐野栄紀教授（愛媛大学昭和58年卒）も同様で、二人はいわゆる「平行移動」したため、学生時代には佐野先生のごことは存知あげませんでした。そんな学生生活を送っていたので、将来研究をするようになるとは夢にも思っていませんでした。

卒業後は様々な先生方から教をこう機会があり、研究の道にはいることとなりました。現在は、アトピー性皮膚炎の病態解明に取り組んでいます。アトピー性皮膚炎は世界的にみても10-20%の小児が罹患しており、またしばしば難治化して一般の医療機関では手にあまり、大学へ入院される患者さんが増加しております。アトピー性皮膚炎はありふれたアレルギーのように考えられていますが、実は原因はよくわかっていません。数年前に皮膚の構造タンパク質に異常があることがわかりました。この物理的な皮膚の異常から皮膚炎に至るメカニズムを解明しようと、現在世界中の研究者が熱い戦いを繰り広げているところあります。

さて、皮膚科は昔から女性医師の割合が高い診療科でありましたが、近年は皮膚科学会に入会する女性は全国的にも7割を超え、女性医師にいかに活躍して頂くかは皮膚科にとって非常に重要な課題であります。教室としても積極的に女性医師をサポートしていきたいと考えておりますので、女性医師もぜひキャリアアップして活躍して頂くことを望んでおります。

最後に、愛媛大学医学部同窓会のみますますのご発展と会員の先生方のご活躍をお祈りします。



## 坂井 晃 (昭和61年卒・8期生)

(福島県立医科大学 医学部放射線生命科学講座 教授)

このたび、平成23年3月11日の東日本大震災による福島原発事故後の福島県民健康調査研究を目的とした福島県立医科大学の講座新設により、平成23年11月1日付けで福島県立医科大学医学部放射線生命科学講座の教授を拝命いたしましたので、愛媛大学医学部同窓会の皆様へ紙面をお借りしてご挨拶申し上げます。

私は、広島県三原市に生まれ中学生まで三原で過ごした後、広島県の修道高校から愛媛大学に入学しました。当時広島県出身の同級生は、隣県ということもあり愛媛県に次ぐ人数だったと思います。専門移行までの1年半を松山市勝山町の4畳半の下宿で過ごしましたが、近く同じ銭湯に通

う理学部数学科で私と同じ国文学の授業を取っていた女の子が住んでおり、人目惚れしたのが懐かしく思い出されます。中高と陸上部であったにもかかわらず、何を考えてか全学の水泳部に入部し、6学年の夏まで西医学部は当然として全学の試合にも出ていました。特に医学部水泳部では大変個性的な先輩友人に恵まれ、その後の人間形成に多大な影響を受け今日に至っております。また奥さんは教育学部出身の水泳部の後輩です。さらに夏限定で医学部山岳部にも所属していました。ちなみに一昨年と今年の東京マラソンに出場し、一昨年は初マラソンで4時間を切りました。iPS細胞の山中教授もマラソンが趣味ということで、辛く面白みのないマラソンをする人に悪い人はいないようです。

基礎配属では内海教授の細菌学（免疫学）教室に（本当は毎週金曜日のソフトボール要員）出入りしておりましたが、ちょうど利根川博士がノーベル賞を受賞された時期でもあり、リンパ球（特にBリンパ球）に興味を持ち、臨床でもできる血液内科を志しました。基礎配属中は、抗原抗体複合体をマウスの尻尾の静脈から投与し腎炎を誘発する実験を手伝っていましたが、現高知大学医学部免疫学教授の宇高先生がすぐく実験されていたのを覚えております。卒業後は当時ではまれな内科全科ローテーション制度のあった広島大学医学部附属病院の研修医となりましたが、研修医の最初から広大の原爆放射線医学科学研究所血液内科に入局を決め、入局後はIL-6が多発性骨髄腫細胞のオートクライン機構による増殖因子であることNature誌に発表された河野道生先生（後に山口大学医学部教授）のグループの大学院生となりました。最近の傾向として、若い先生に臨床と研究の両立を求めると大学に残らないようですが、恵まれない設備でも臨床をしながら世界的な仕事をする河野先生の仕事の姿勢には、研究以外でも多くのことを学びました。免疫グロブリンH（IgH）鎖遺伝子の発現を認めないBJP型骨髄腫のIgH鎖遺伝子解析が私の大学院の研究テーマでしたが、その後米国（NIH/NCI）に留学する機会をいただき、CLL患者のIgH鎖遺伝子の体細胞突然変異の解析やcDNAアレイを用いて悪性リンパ腫の遺伝子解析を行いました。IgH鎖遺伝子再構成の機序は、放射線障害によるDNA損傷の修復機序とも関係し、また多発性骨髄腫の前病変である単クローン性M蛋白血症（MGUS）は、長崎の被爆者研究において若年の近距離被爆者に有意に多いことが報告されています。

このたび福島原発事故による福島県民の放射線医学健康調査の職をいただき、今後低線量被ばくの人体への影響調査研究の一つにBリンパ球を用いた解析ができないかと考えております。愛媛大学医学部同窓会の皆様には、今後ともご指導ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

# 卒業生からのメッセージ



## 薬師神 芳洋(昭和63年卒・10期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 病態制御 臓器機能統御 医学臨床腫瘍学 教授)

皆さんお元気でしょうか?今回同窓会雑誌に文章を載せて頂く事になりました薬師神です。2012年9月1日付けで新設の臨床腫瘍学講座に赴任致しました。

同窓会雑誌に載せる文章のご依頼を、第一解剖学の松田教授から頂いた時、「はて、私は何期生になるのだろうか?」と、ひよんな思いかれました。高校(宇和島東)を卒業後浪人し、同級生だった友人は大学で先輩。更には2年時の留年騒動。同期入学の友人はまたしても先輩となり、私の同級生はいったいどなたになるのか今ひとつ定かではありません。

松山赤十字病院での勤務と留学の期間を除き、延べ20年もの間、この愛媛大学医学部で仕事をさせて頂きました。私の恩師である第一内科小林謙元教授には、「愛媛に生まれ(宇和島市)、愛媛で育ち(北宇和郡津島町)、愛媛(愛媛大学)で生活するのを、井の中のかわず(蛙)と呼ぶのです」と鼓舞されたことを覚えています。9月、初めて「教授会」なるものに参加させて頂いたのですが、果たして私のような蛙がここに座して良いものか、不思議な感覚でありました。そしてあの学生時代の、恐れ多き(格調高き)教授陣のお顔が浮かんで参りました。

すいません、少しお付き合いください。

リケッチア小林先生からは、あのスローテンポの臨床講義の中に、いつも研究者としての厳しさと、私ども学生に向ける父親のような愛情を感じたものです(小林先生は平成20年8月4日私が病棟で見送りました)。国府テンシン先生におかれましては、あの張り詰めた病棟回診、さらには理路整然としたご講義が本当に素晴らしい、怖く厳(いか)つい顔貌(いか)の不思議と愛着を持っておりです。太田肝臓先生からは、名札を忘れた際に「私は僕に名前を覚えてたくはないのですか?」と叱咤され、震え上がった事を覚えています。しかしその後、「薬師神とは良い名だね」と微笑んでいただきました。

「お前のような馬鹿はうち(脳外科)に入らないと成長しない」と熱心に勧誘して頂きました松岡先生も、先日鬼籍に入られました。初めてご遺体を前にして、医学生としての自覚に目覚めた解剖学実習。いつも優しい高島先生はもういらっしゃいません。当時アイドルだった 絹谷先生は昨年退官されました。

突然怒り始める西田先生の寄生虫学は、死ぬほど勉強しました。研修医の頃、肝疾患者の便を持参し「肝吸虫を疑っています」と言った際、「これは横川吸虫の虫卵です。でも良く覚えていました。」と笑いながら慰めて頂きました。今でも鑑別疾患には寄生虫症を挙げます。鳥居現教授も、西田先生の実直なDNAを引き継いでいらっしゃいます。

ダンディな世界の柳原教授は、今でもロマンズ・グレーで格好良く、先日私の拙い講演の後、「イヤー面白かったよ」と爽やかな風をいただきました。第二解剖の上原先生におかれましては、愛情いっぱいあの九州弁で、奥様共々今もこのような私をお酒に誘って頂きます。

ここまで書いて突然筆が止まります。

新設医大の創生期にキラキラと輝いていたあの先生方と比べ、こんな私に何が出来るのでしょうか? 私の使命は一体何なのだろうかと…。

ご存知かも知れませんが、「臨床腫瘍学」という分野は内科学会の中に認知されてはいません。本来、病気というものは個体に宿る異常と考えられていたはずです。しかし、診断技術や治療法の進展に従い、医学の関心の多くは臓器や器官に向けられ、「森を見ずして木を見る」専門医の社会となってしまいました。

こういった縦割りの医療の中に一石を投じるのが「臨床腫瘍学」であり、がんを全人的に捉えることが出来る医療人を養成することが、この「臨床腫瘍学」の使命だと私は考えます。一方、がんの診療には一定のスキルも必要です。疾患特異的な対応に加え、臓器横断的な対応にも明るく、補助療法や症状緩和に知識を有し、全人的な対応をチーム医療の中で考察できる医療人を養成する。その為には、当事者である患者さんやがん経験者やその家族、また地域で地道にがん医療を行う医療人との連携を行い、広い視野で医療や教育を行わなければなりません。

ジョン・F・ケネディの就任演説にご存知の一節があります。

\*\*\*「\*\*国家があなたに何をしてくれるのかを問うのではなく、あなたがこの国の為になにができるかを問いなさい。」\*\*\*

\*\*\*多々ご意見があるかも知れませんが、この「国家」を「医学」「医療」「医学教育」更には「がん患者さん」に置き換えても宜しいでしょうか?\*\*\*

\*\*\*そして、私に何が出来るかを問い続けながら、もう少しこの愛媛大学医学部で精進しようと思っています。どうぞ皆様、私の向かう方向にご支援・叱咤をお願いいたします。\*\*\*

# 新任教授からのメッセージ



## 増本 純也

(愛媛大学プロテオ医学研究センター 教授 兼 愛媛大学大学院医学系研究科 病態解析学 ゲノム病理学 教授)

本年より前任の能勢真人教授の後を引き継ぎ、愛媛大学プロテオ医学研究センター専任で、兼ねて医学系研究科ゲノム病理学分野を担当することになりました増本純也と申します。愛媛大学医学部の同窓の先生方には、ご挨拶が遅くなり恐縮です。略儀ながらこの場をお借りして、自己紹介とご挨拶を申し上げます。

生まれは東京都新宿区牛込です。高校までは新宿区を出たことがなく、少し遠出をすると不安にかられたほどの温室育ちです。と申しましても裕福な家に育ったわけではありません。高度経済成長期に東京都が積極的に建設を進めてきた低所得者向けの賃貸アパートで、2Kの間取りに家族4人が生活しておりました。現在では高齢化が進み、『新宿区内に限界集落が出現』などと報道されていますし、周辺の児童数も減少の一途で、複式学級の実施や小中学校の統廃合が行われるなど、地

方山間地と同様に過疎化が進んでおります。

東京都立戸山高校を卒業後、富山医科薬科大学薬学部薬科学科、信州大学医学部医学科を卒業しました。卒業後すぐに分子腫瘍学の基礎医学の大学院に進学しました。大学院修了後、不安定な日々雇用研究員を経て、信州大学医学部附属病院臨床検査部の医員に採用されました。いつ絶えるとも知れない外来での採血、手術後の臓器の切り出しや迅速診断、天井に突き刺さる程積み上げられた病理標本、世界の盲点を突いた研究を行うための基礎実験、それでも夜が明ける前になんとか家に帰りたいと思っているのに依頼される病理解剖などと格闘しているうちにあっという間に月日が過ぎてしまいました。この間、ミシガン大学に留学して難を逃れたり、結核感染後の予防投薬で肝障害になり入院して難を逃れたりして、なんとか休養をとることができました。薄給や多忙のためこれまでに家族には大変な負担をかけたまま。現在では、医員の待遇もよくなり、基礎に進む大学院生は厚遇されるなど隔世の感があります。

以上のような経緯からもお気づきのように、私は形態からゲノムへという順序ではなく、有機化学から高分子化学、蛋白質、ゲノムから形態へとという順序で病理学の領域に入ってきました。しかも臨床検査データを総合的に判断するとともに、自ら治療や診断に直結する検査オーダーを立てて病理診断を行う臨床病理学を先に専攻したため、どちらかというと形態学より分子生物学や生化学を得意としています。このような事情もあって臨床検査専門医(Clinical pathologist)と細胞診専門医を先に取得しました。数年後に病理専門医(Anatomical pathologist)を取得するとともに、基礎医学講座に移り、人体病理学と実験病理学の思考を学びながら、教室員全員で教育・研究・病理診断を担いながら今日に至っております。

ゲノム病理学分野には、前任の能勢教授の築いてこられた自己免疫疾患の知見やモデルマウスがおり、伝統を受け継いだ教室員とOBの方々活躍していらっしゃいます。今後は、これらの伝統のうえに新しい歴史を築いて参りたいと思います。そして、甚だ微力ですが、愛媛大学の発展とよい医師を愛媛県に残すために、奮闘努力する所存です。同窓会の先生方にはお世話になると存じます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

## 医学祭を終えて

第36回愛媛大学医学祭実行委員長 宗宮 快



今年は5月19日、20日に医学祭が開催されました。今年で36回目となった医学祭ですが、先輩方の作り上げたものを参考にし、自分たちにとっても、来てくださる方々にとっても最高の医学祭にしようという思いで、実行委員一同並びに協力してくれる在校生で準備に取り組んできました。こうして第36回医学祭を開催することができたのも、在校生、OB・OGの方々、大学の先生方、そして地域住民の方々といたる多くの方々のご理解とご協力のおかげだと思っております。

私達は今回の医学祭のテーマを「wish」とさせていいただきました。このテーマには「医療に関わる全ての人の願いを叶えていきたい」という思いが込められています。このテーマに込められた思いで私達、実行委員はこの医学祭を作り上げてきました。講演会では愛媛大学大学院公衆衛生・健康医学分野教授の谷川武教授に、東京電力福島原子力発電所の産業医活動についてご講演していただきました。また、医師であり探検家でもある関野吉晴さんにはグレートジャーニーについてご講演していただきました。また、愛媛大学のOBの医師である中村俊平さんには半年間かけて世界旅行をした体験談をご講演していただきました。どのご講演も様々な性別、年代、職種の方々に興味を持ってもらえ、世界観の広がるものになったと思います。例年行われている栄養企画、看護科1日体験、キャンパスツアー、救急車展示も大盛況でした。また今年新たな企画として行った、ネパール活動報告、ペシヤワール会・現地報告写真展@愛大医学祭、たまご落としコンテストのほうにも、たくさんの方々が賑わっていました。

どの企画においても、私たち実行委員の力だけでは、このような素晴らしい企画を行うことはできませんでした。地域の方や諸先生方、ご講演していただきました方をはじめ、多くの方々のご理解とご協力のおかげだと思っております。

今年は天候には恵まれたものの、20日の「マキシマム・ザ・ホルモン ヒダカトオル」のゲストライブにおきまして、体育館の床が損傷し、途中で公演中止、後夜祭中止という結果になってしまいました。しかし、ゲストライブのお客様、在校生、先生方からの温かい労いと励ましの声に実行委員一同救われました。結果としては残念なものになったのですが、緊急事態が起きたときや、その後の対応、今後の対策という貴重な経験を通じて、実行委員並びに同級生との結束の大切さを実感しました。この経験を後輩達に引き継ぎ、来年以降、自分たちなりの最高の医学祭を作ってもらいたいと思います。

これまでご協力くださった皆様方に実行委員一同、感謝の思いでいっぱいです。本当にありがとうございました。

## スタンフォード医療研修に参加して

■ 石川 将 (5年生)

(最前列左端)

今回のEHCプログラムでは初めの一週間を主にスタンフォード大学、残りの一週間はUCSFで過ごしました。病棟での回診や小児のホスピスの見学をしたり臓器移植で有名な双子の姉妹アナベルとイザベルの話をついたり二週間とても充実した毎日でした。プログラムの過程を通して様々な人に出会いました。スタンフォードの救急で働く医師、医学教育に携わっている医師、お寺の住職、日本人研究者など。皆それぞれ活動している分野は違いますが、自分の仕事に誇りを持ちとても輝いて見えました。研修中に聞いた言葉で印象に残っているものに「自分からみて輝いていると思う人を見つけろ。そしてその人のようになれるように努力しろ」というものがありました。そう思える人とたくさん出会えました。二週間で学んだ事は多いですが中でもこれが私にとって一番大きな財産になったと思います。このような素晴らしい機会を提供して頂いたVIAの方々、医学教育センターの方々、そして両親に感謝します。



# スタンフォード医療研修に参加して

## ■ 酒井 真一郎 (5年生)

私がEHCプログラムに参加した中で最も衝撃を受けたのは、スタンフォード大学の教育制度でした。

日本の医学生は大学に入ること自体が最も難しいように感じますが、アメリカではそのレベルの振り分け試験が三回あり、どれ程の社会的貢献をおこなったかなども評価されます。また、生徒は毎年小さくグループ分けされ、それぞれに教師が割り当てられ、教師はその生徒達の成績で評価されて給料が支払われるようになっています。評価によっては勿論解雇も有り得るため、教える側もより必死になるようなシステムとなっていて、他にも、成績が振るわない生徒には学校側が無償で家庭教師をつけるなど、徹底された教育がなされています。こういったシステムのためか、スタンフォードの学生には熱意が感じられ、日本の医学生とは学ぶ姿勢が全く異なる印象でした。『教育制度』を充実させる事で多くの優秀な医師を育て、医療そのものをより良いものにしようという、非常に良くできた『医療制度』だと思いました。

私はこれをただ羨ましく思うのではなく、日本の医療をより良いものに変えるための参考にし、自身の勉強に対するモチベーションの向上につなげていかなければならないと強く感じました。



## ■ 末田 敬志郎 (4年生)

(前列中央)

3月15日から29日までの間viaの主催するExploring Health Care Programに参加し、アメリカの医療を間近で体験してきました。もともと将来は海外でも医師として働いてみたいと考えていたのがこのプログラムに参加したきっかけです。実際に参加してみると日本とアメリカの違いに驚く日々の連続でした。アメリカでは必ず個人を尊重しネガティブな情報もすべて伝えていました。また、宗教も強く患者のケアに関わっておりボランティアでスタッフが多くの病院内におられました。日本で院内に僧侶の方がいることはあまり良い印象を与えないだろうと向こうの宗教の身近さに改めて関心を抱きました。やはり、一番驚いたのは保険の違いで、アメリカでは医療を受ける前には必ず保険を確認し医療費を払えない患者は病院も診ないというスタンスをとっていました。今回の研修に参加したことで、これから日本で自分がどのように勉強していくかかなり大きな影響を受けました。これからはもっと視野を広げて学んでいきたいです。最後になりましたが、この研修を支援してくださった方々に深く感謝申し上げます。



## ■ 橋 侑南 (4年生)

(右側)

EHCプログラムでは、とても多くのことを経験しました。日本では見ることのできないような病院のシステムや施設の見学はもちろん、スタンフォード大学やUCSFの講義を受けたり、ドクターラウンドにも参加したりしました。子供のためのホスピス施設、医学生が運営するfree clinicなどは、特に印象的で驚きました。また、UCSFの生徒と一緒にsmall discussionに参加したことは、とても心に残っています。生徒全員が次々に意見を発する姿、勉強熱心な姿はとても刺激的でした。アメリカや日本の他大学の人々とたくさん話をし、様々な考えを知ることはとても新鮮で、更に自分の考えを深め、自分自身を見直すことも出来ました。同時に、もっと色々なことを学びたい、経験したいと思いました。これから残り半分の学生生活で、医学の勉強はもちろん、英語の勉強、ボランティアなどの活動にも積極的に参加し、更にたくさんのことを体験し、広い視野を持って様々なことを吸収していきたいと思っています。



## ■ 鳥飼 泰彦 (4年生)

(左から2人目)

今回の研修の中で一番印象に残ったことは、文化の多様性です。いろいろな人に会い、いろいろな物を見て、話を聴いて、日本とアメリカとの違いに驚きました。アメリカは多民族国家であるため、自分の考えを強く持っている人が多く、とても刺激を受けました。医療については、アメリカと日本の保険制度の違いと問題点や、医学教育システムの違いなど様々なことについて学びました。また、医療・学問だけでなく、関東圏の医学生との交流も持てたことも良かったです。

今回の研修では自分の語学力が一番障害となりました。実際にプログラムの内容を理解しきれない部分がたくさんあり、語学力がもっとあれば、よりたくさんのお話を吸収できたに違いないと思います。また、他国どころか、自国の医療制度すら、理解していないことが研修でよく分かりました。このような状況のなかでも、研修に参加したことで多くの貴重な経験を得られたことに感謝し、大切にしていきたいと思っています。今回の研修で受けた刺激をしっかりと今後の学生生活に結び付けていきたいと思っています。



## 2期生同期会報告

平成23年4月に二期生の岩田猛先生が国立病院機構愛媛病院の病院長に就任され、8月20日に祝賀会が開催されました。一次会は十五万石で二次会は全日空ホテルで行われ、会には県内はもとより県外からも参加があり、盛大に行われました。会の中で「愛媛病院は愛媛大学医学部とほぼ隣接しており、両者の協力は互いの発展の為に不可欠と考えられてきたが、愛媛大学卒業生である岩田先生が病院長になられ益々の発展が期待される」という主旨の祝辞が印象的でした。また、「岩田先生の講義ノートは完璧で、そのお陰で卒業出来た人も多い」という昔話には相づちを打つ者が多く、岩田先生の真面目さが思い出されました。会では祝辞とともに全員の近況報告があり、今回出席出来なかった級友からのメッセージも披露されました。



(文責 松田正司)

## 17期生同期会報告



Long time no see!

平成23年9月23日に第17期(平成7年卒)の同窓会が平成17年以来、松山市内で開催されました。前回はトロント大学への臨床留学直前であり、壮行会を兼ねれば良いと同級生に言われましたが、なぜか自ら幹事をしておりました。そして、平成21年に帰国して以来ずっと開催のリクエストがあり、幹事を命じられこの度開催することになりました。しかし、諸事情により卒業アルバムが存在しない学年のため連絡網が存在しませんでした。そのため、どれくらい集まってくれるのか焦りました。とは言え、愛媛大学始まって以来、最も卒業生が残った学年でもあり(81%:96名中78名)、およそ2ヶ月で約50名の旧友と連絡が付きました。残った人数が示している通り、結束力の固い学年でもありました。折角なので、卒業年度にこだわらず、平成元年入学～平成7年卒業の間に第17期生が出会った旧友(諸事情により入学は一緒でしたが、卒業年度の異なる旧友)にも可能な限り声を掛けました。そして、28名(うち17期生26名)＋子供2名が参加し、再会を祝して夜中3:00前まで語り合いました。次回も幹事を命じられ、卒後20周年で再会する事を約束しました。

See you then!

(文責 熊木天児)

## 23期生同窓会報告

平成23年10月29日に医師となって10年たち、卒業後初めて23期生の同窓会を松山のHarunaにて開催しました。ずいぶん前より同窓会をしようという案は出ていましたが、なかなかみんな忙しく開催の音頭をとる人がいないためか今まで行うことができませんでした。このままでは一生同窓会をできない可能性も出てきたため期日と場所だけを先に決めて連絡を取り始めました。開始10分前には5人しか集まっておらずどうなることかと思いましたが、蓋をあければ総勢26名の参加となり幹事としては安心しました。初めての開催であり県内だけでなく遠方(海外、東京など)からの参加もありました。卒業後初めて再会する者もいましたが、数人を除き、あまりにもみんな変わっていないことに驚きました。学生の頃のようにいろいろ話をし、楽しく時間を過ごすことができました。2次会もほぼ全員参加しゆっくり時間を過ごすことができました。



また再会することを約束し会はお開きとなりました。

幹事の不手際もあり連絡がなかなか取れなかった人、連絡が遅くなった人、急用でこれなかったり仕事の都合でこれなかった人達も含め今後、同窓会が再度開催できればと考えておりますので「是非我こそは」、と考えておられる方は次回の幹事をお願いします。

(文責 日高 聡)

## 7期生同期会報告

7期生は、卒後25年目の2010年に松山にて第1回の同窓会を開催し、その際に、今後の7期生同窓会を、2年毎に松山・東京・大阪の持ち回りで開催することをきめました。これに基づき、今回、第2回7期生同窓会を、2012年2月11日(土)の午後6時半より帝国ホテル東京にて、来賓として解剖学第二講座元助教授で現早稲田大学人間科学部教授の小室輝昌先生をお招きし開催しました。同窓生は全国より21名の参加がありました。会は山口県より参加の綿田敏孝君の乾杯で始まり、昨年、鳥取大学医学部ゲノム形態学教授に就任された海藤俊行君の懐かしくて楽しく、そして少しアカデミックな講演や、各方面で活躍されている参加者全員からの近況報告を聞きながら楽しい時間を過ごしました。二次会には15名が参加し、この頃には適度に酔いもまわり、学生時代を彷彿とさせる飲み会となりました。次回は2014年に松山での第3回7期生同窓会での再会を約束し、日付が変わる頃に散会となりました。今回、参加できなかった方、次回は是非ご参加ください。(文責 西尾佳晃)



## 8期生同期会報告



平成24年7月7日、七夕の日に愛媛大学医学部8期生は1年に1回の再会を喜びあいました。3年前に初めての同窓会を開催してから、これで3度目の開催になりましたが、27人が参加し盛大に同窓会を行うことができました。今回の同窓会の最大の話は、坂井晃先生が福島大学放射線生命科学講座教授に就任したことでした。放射線医療の拠点化を目指し、また福島の復興のために頑張っていただけのように同窓会員一同応援していくことを誓い合いました。その他の話題は、皆50歳を超えた

ことから、肥えたやら、痩せたやらと体型に関する話題が残念ながら(健康が最も重要なことではありますが)中心でした。同窓生の親睦をより深めるため昨年より8期メーリングリストを立ち上げ、同窓会もより参加し易いように同窓会長の金澤先生と東野先生と相談し、毎年7月第2土曜日に開催することを決めました。このニュースを見られ、まだ同窓会に参加していない8期生の方、来年は松山でお会いしましょう。

(文責 大蔵隆文)

## 6期生同窓会報告

平成24年8月4日に松山全日空ホテル3階「ローズルーム」で、6期生同窓会を行いました。6期生同窓会は、4年に1回オリンピックの年の夏に行うことに決めていましたので、前回の2008年の東京での同窓会に引き続いての同窓会となりました。今回は、過去最大の35名の参加者となりました。卒業後初めて28年ぶりに会った先生、また4年ぶりに会った先生など、なつかしい顔がいっぱい見られました。卒業時とほとんど変わらない先生もいますが、かたや全く雰囲気が変わった先生もいました。山本昌也、仁志川高雄、西原淳、大上まどかの元軽音楽部のメンバーが主体の7人編成バンド(Sonic Boom)の演奏による余興は、2か月間の練習の成果もあり、すばらしい演奏でした。また、参加者全員の近況報告もしてもらいました。皆さんの共通の話題の一つは、お互い50歳を超えて、メタボを含めた自身の健康管理についてです。ジョギングを始めた先生、スポーツジムやダンス教室に通っている先生、などなど。老眼に困っている先生も多くいました。また、もう一つの共通の話題は、多くの先生が、子どもが大学のために親を離れ、夫婦水入らずになっていることです。趣味を生かしながら、楽しい生活を送っているようでした。二次会では、全日空ホテル14階のラウンジで、現在の仕事のこと、家族のこと、将来のことなど、夜遅くまで語り合っていました。



6期生では、講演や出張手術などで同期生が県外から愛媛に来た時には、ミニ同窓会を行っています。最近では、昨年7月にも富永真琴先生が日本疼痛学会で松山に講演で来た時にミニ同窓会を行いました。今後も、機会あるごとに、ミニ同窓会を予定します。

最後に、健康には十分に気を付けて、次回同窓会、ミニ同窓会でまた会えることを楽しみにお開きとなりました。

(文責 向田隆通)

## 第9回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会 報告



第9回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会は、平成23年1月22日に表参道パソナ倶楽部において9期生主催で開催されました。本会員は350名に達し、今回の参加者は44名でした。

総会では、総合司会のデンマーク国立オーフフ大学脳神経病態生理学研究所(9期生)酒向正春客員教授より会計報告の後、愛媛大学高田清武教授からの愛媛大学医学部のスライド便りが紹介されました。

学術講演では、埼玉医科大学総合医療センター整形外科(9期生)平岡久忠准教授より「前十字靭帯の治療の変遷」が語られ、聖マリアンナ医大脳卒中科(9期生)植田敏浩教授より「頭を切らない脳外科手術の進歩：メスを置いた脳外科医より」を勉強させて頂きました。特別講演では、スポーツジャーナリストの二宮清純氏から「勝者からのメッセージ」を野茂投手の生き様を通してお話し頂きました。どの業界もトップの考えや行動は通じており、技術を盗む努力の必要性を説かれました。医療だけでなく、プロの世界でも「プロフェッショナルを盗む」学習力が低下しているそうです。

その後は懇親会。会場の(株)パソナの南部代表よりワインのプレゼントがあり、豊富な料理、飲物を楽しみました。集合記念撮影の後に、参加者全員よりショートスピーチを頂き、あっという間の2時間半でした。年に1度、昔の仲間と美味しいお酒が飲めるのは幸せです。来年は、さらに、多くの同窓生が参加されることを楽しみにして、10期生にたすきをつなぎました。(文責 酒向正春)

## 第10回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会 報告

2012年1月28日(土)、今回は第10回の節目ということで、いつもと形式を変え着席にて食事を楽しみながら講演を拝聴するスタイルでした。

まず、高田清武先生をお招きし「愛媛大学だより」として現在の愛媛大学の状況に関してご紹介頂きました。自分たちが利用していた施設がリニューアルされるなど最新の情報が多く興味深いものでした。

また、今回8期生の坂井晃先生が福島県立医大 放射線生命科学講座の教授に就任されたとのことで一言ご挨拶を頂戴しました。

教育講演としましては、10期生筑波大学医学医療系臨床医学域(臨床医学系 神経内科)准教授の石井一弘先生より「茨城県神栖市の有機ヒ素化合物中毒について」のタイトルでご自分が近隣のヒ素化合物中毒を発見し解明していくまでの経験談をお話頂きました。

その後、1期生の吉田謙一先生が今回で同窓会会長をご卒業されるとのことで、卒業講演「心臓突然死、診療関連とともに」に題して講演頂きました。吉田先生の大変興味深い研究内容を皆食い入るように拝聴していました。

最後には、次回幹事の11期生三瀬先生、小野里先生、渡辺先生より来年の意気込みを頂き、終了を迎えました。皆、名残惜しいのか、会終了後も先輩・後輩・同期生と話しこむ姿が多く見られました。会自体は大変スムーズに進み安心致しました。今総会が同窓生の親睦、情報交換の場となってくれたことと思います。(文責 北原比呂人)



## 第9回愛媛大学医学部同窓会九州支部総会 報告

本年も、平成24年7月28日(土)、九州支部総会を、例年のごとく、博多都ホテルにて21名の参加で執り行うことが出来ました。

今年は第9回を数え、13期生の山中雅文先生に「冠縮性狭心症と遺伝子解析」のテーマで御講演頂きました。

要旨は、「私たちは冠縮性狭心症症例において一酸化窒素合成酵素遺伝子に-786T→C変異を見出し、その遺伝子変異の特徴は、冠動脈に狭窄のない心筋梗塞患者に多く認め、また、冠縮重症症例に多く認められました。また、-786T→C変異があるとReplication Protein A1という因子が結合し、転写活性を抑制することを明らかにしました。今後はこの遺伝子解析にも続いた一酸化窒素合成酵素誘導薬の製作などに携わってゆきたい。」というものでした。専門外の人には少し難解であったかなという私の印象でした。その後は乾杯から会食、自己紹介で一次会の終了、引き続いての二次会と盛り上がりました。昨年まで体調を崩され欠席が続いた薬理の小川暢也先生が復活、お元気になられ3年ぶりの参加が見られ皆でほっとしたものでした。

来年は第10回となるために、一期生のホープ東大法医学教授の吉田謙一先生を演者に招き、記念すべき節目の支部会とすべく張り切っています。日付けは7月27日(土)と既に決定しておりますし、吉田先生の出席も快諾済みです。九州の同窓生の皆様、奮って御参加下さい。30名参加を目標にしていますのでよろしく!

(文責 九州支部長 西口昭弘)



# 《会員の個人情報に関する取り扱い》

愛媛大学医学部同窓会は、会員の個人情報の保護と適正な取扱いに取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## 1. 個人情報の使用目的

同窓会が取得した個人情報は、以下の目的に使用されます。

- ・同窓会名簿の作成
- ・定期的刊行物(会報、名簿)の送付
- ・同窓会会費徴収のための業務
- ・事務連絡及び各種文書の送付
- ・支部会の行事開催に関する事務連絡及び各種文書の送付

## 2. 個人情報の提供

会員から情報の照会依頼があった場合、折り返し対応させていただきます。また、第三者からの電話照会等での返答は致しかねますので、ご了承ください。

## 3. 個人情報の管理

「会員名簿」は、施錠保管しており、「データベース」は、インターネットに接続していない専用PCで独立した作業を行っております。

## 《次号会報原稿募集》

### ★同期会報告

幹事の方は、氏名、卒業年、開催予定日を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 20名以上の参加
  2. 報告文、集合写真を提出(会報原稿)
  3. 会費未納者への納入勧誘
  4. 3年に1回

### ★学生海外研修留学報告・医学祭報告(学生会員)

学年、氏名を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 報告文、写真を提出(会報原稿)

## 《会費納入のお願い》

同窓会活動は、会員の皆様の会費で支えられております。会費納入をお忘れの方は、お早めに同封の用紙にてお振り込み下さい。

郵便振替NO. 01620-0-6644

入会金 1万円 終身会費4万円(合計5万円)

## 《会員名簿の不正使用禁止》

会員名簿は、会則により会費納入者のみ、一会員一冊の配布となります。

第三者に渡り不正に使用されますと、会員に多大な迷惑がかかります。他人に譲渡しないよう、また破棄する場合も特段のご配慮をお願い致します。事務局としても最大の注意を払っておりますが、皆様のご協力をあわせてお願い致します。なお、会員名簿の再送付は致しかねますのでご了承下さい。

注)卒業生と偽り、名簿の請求や他の会員の住所照会の問い合わせ電話があります。原則として電話での問い合わせには、即答致しかねますので何卒ご了承下さい。また、不審な業者から会員の方へ直接問い合わせがある場合も十分ご注意くださいようお願い致します。

## 《お願い》

会員の皆様のご寄稿、ご意見及びご感想などは是非お寄せ下さい。また、会報で取り上げてみたいテーマ、企画等アイデアがございましたらご一報下さい。お待ちしております。

## お知らせ

### 第29回

### 愛媛大学医学部同窓会通常総会

次回通常総会の開催予定をお知らせします。万障お繰り合わせの上、ふるってご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時：平成25年5月17日(金)18時～

場所：臨床第2講義室

議題：事業報告及び会計報告、予算の承認、その他

## 連絡先

〒791-0295 愛媛県東温市志津川

愛媛大学医学部同窓会事務局

(生体機能解析学講座 解剖学・発生学分野内)

(旧解剖学第一講座)

TEL：089-960-5231 (受付10時～17時)

FAX：089-960-5233

E-mail：eusmdoso@m.ehime-u.ac.jp